

良々塾 開塾に寄せて

この度、元号が平成から令和に変わるちょうどその時期に、兵庫県芦屋市にて、大人の方向けの〈英語と文化を学ぶ塾〉「良々塾」(よしよしじゅく)を開塾する運びとなりました。

開塾にあたって、まず何よりも大切な「場」をご提供くださいます、株式会社 The Music Center Japan

中西隆夫・淳子先生御夫妻に、厚く御礼を申し上げます。本来、「良々塾」はもう少し時期をみてからのオープンを考えておりました。が、今回、中西夫妻の強いお勧めに背中を押される形での発進となりました。これから塾活動をさせていただく場は、お二人が運営される音楽・芸術・文化の総合施設 The Music Center Japan (芦屋市東芦屋町)です。既に、私が理事長/事務局長を務めます「日仏音楽協会＝関西」(一般財団法人カンセイ・ド・アシヤ文化財団傘下機関)主催「フランス音楽コンクール」の会場としても、昨年来お世話になっており、今回、新たに「良々塾」でもお世話になることに、御縁の有り難さを強く感じております。

「大人のための、外国語学習を通して知的好奇心を満たす、ハイ・クオリティな学びの場を」というご提案を中西夫妻からいただいた時、私の中に浮かんだのは、「二つの学び」という言葉でした。普段、出講先の大学等でも受講者の学生諸君に向けて話していることなのですが、「良々塾」のめざすところや、特色に直接繋がるお話かと思いますので、今日はこれを書かせていただくことで、開塾に寄せる言葉としたいと思います。

人間が「ものを学ぶ」営みは、人類発生以来、常に複雑多岐にわたってきましたが、それは結局のところ、大きく分けて二つのかたちの「学び」になるのでは、と私が思い始めたのは、ずいぶん前のこととなります。このような内容は、既に様々な学問体系において整理・精緻化されてもいると思いますが、今日は、敢えて、私という一個人の語り口で書かせていただきます。

一つ目の「学び」は、知識や技術の習得が、生身の人間として今を生きる自分にとって、色々な意味で「直接的影響」を及ぼす「学び」です。もう少し具体的な表現でいうと、「良くも悪くも、〈それを学ぶ／学ばない〉が実生活・実人生に如実に響いてくる」というタイプの「学び」です。

しばしば、出講先の大学で、学生の皆さんから「どうしたら英語がしゃべれるようになりますか」「どうすれば英語をマスターできますか」という質問を向けられますが、その際、私はこのように答えます。「非常事態の環境下で拘留されて、〈英語がしゃべれなければ、一週間後にあなたは必ず射殺されます〉と言われ渡されたら、しゃべれるようになると思いますよ」

語学教師の立場にしては無責任な回答だ、と思われる方もいらっしゃるかもしれません。が、問答無用の状況下に置かれた時、人間が発揮する「学びの力」にはすさまじいものがあるということは、皆それぞれに、ご自身やご家族、ご友人方の実体験をはじめ、映画や小説などの世界でも、数多くの例をご覧になっているのではないのでしょうか。いわゆる「学問」だけでなく、様々な技術や知識を身につけなければ「生きていけない」という状況に置かれた時、人は文字通り死にものぐるいで「学び」ます。まさに「火事場の馬鹿力」という言葉が合うような、エネルギーの爆発をして、己が持てる認知能力・学習能力・体力・精神力の全てを傾けて、知識や技術の習得に向かうのです。

現代の日本で、このタイプの「学び」が、わかりやすい形で現れているのが「受験勉強」や「資格取得のための勉強」「就職活動のための勉強」などではないかと思います。これができさえすれば、これをマスターしさえすれば、幸せな結果を手に入れられる。同時に、これを習得できなければ、不幸せや落胆の結果しかやってこない。人間は、本来、良くも悪くも「変化」を嫌う面があり、よほどのことがないかぎり、「現状維持」を続けようとする生き物だ、とは心理学などでしばしば言われることですが、まさに、「よほどのこと＝このままでは現状維持が不可能で、かつ「学ばなければ」今よりも悪い状況がやってくる事態」に直面させられて初めて、大きなエネルギーを要する「学び」の行為を始めるのだ、ともいえるでしょう。

この時の「学び」の爆発力自体には、本当にすごい例が多々見られます。いわゆる「一念発起」というものですね。おちこぼれだった高校生が、半年で偏差値を二桁上げて、見事難関大学に合格、とか、失職の危機を経て奮起、ビジネスをイチから学び直して起業成功、など、「人間の能力の底知れぬすばらしさ」を感じさせてくれるものが多々あります。

しかし、その一方で、このタイプの「学び」には、ともすれば「空しさ」や「新たな不安」を生むきっかけにもなる、という皮肉な面もある、ということを実感されている方は多いのではないのでしょうか。努力して受験には成功したものの、入学と共に目標を見失ってしまったり無気力になってしまった、あるいは仕事での成功を夢見て様々な資格試験に挑戦しているけれども、一つ資格を取得したら、別の資格も取得せねば、と焦って、結果的に四六時中、何かの資格試験のための勉強をし続けている、など。真面目で「勉強することの苦労やストレス」への耐性が高い人ほど、大きな頑張りをした後に空しい気持ちに襲われることが多いように思われます。

「読み書きそろばん」さえできれば、特別な技術や知識をもたずとも、ふつうに一生を全うすることが可能であり、また、たとえ「必要に迫られて」身につけた技術や知識であっても、それを一生かけてじっくりと磨いていくうちに、自らの中で輝くものへと変容するのをまのあたりにする喜びを知る人も多かったであろう昔と違って、物事の移り変わりや進むスピードが速くなる一方の現代では、「実生活に直接影響を及ぼす〈学び〉の行為」は、生身の人間が生涯で習得するにはあまりに多くのことを要求してくるようになっており、正面からこれに応えようとして疲れ果ててしまう人や、そもそも「学ぶ」ということ自体を嫌悪・回避したり、無関心になったりする人が増えているように感じられます。

さて、このような学びとは別に、もう一つの「学び」の形が存在します。それは、「私はそれを知っている」(I know it) 「私はその技術を使うことができる」(I can use it)で、いったん完結してしまうものではなく、それぞれが人生を生きていく中で、時間という庭に植えられた植物が根を伸ばし、茎を長くして葉を茂らせていくかのように、絶えず発展・変容を遂げていく「学び」です。前者の「学び」が、点数・成績・資格・技術など、目に見える形で現れることが多いのに対し、こちらの(後者の)「学び」は、目に見えないことが多く、それゆえに「そんな学びが〈何の役に立つ〉のか?」と言われることがままあります。たしかに、そう言われても返す言葉がない、という面は否めません。古典文学、クラシック音楽、哲学や思想研究、美学、文化史などを学んだから、といて、それが今日明日の自分の生活に直接何の影響を及ぼすのか、何の役にも立たないのではないか、と言われたら、そうですね、仰る通りです、と応えざるを得ないところがあります。

しかし、この「学び」(前者を「実生活に直接影響を及ぼす学び」と名付けましたので、後者をこれ以降「人生に深く根ざす学び」と呼ぶことにします)こそ、現代のように流れの速い社会環境下で、強く健やかな精神を保って生きるのに不可欠だと、私は考えています。その理由として、最も大きなものを挙げるとすれば、この学びによって、人は居ながらにして、「自分という個の範囲と限界を超える時空」を自らのうちに持つことができるから、ということになります。

個人としての人間が実際にカバーできる範囲というのは、本当に小さく狭いものです。我々それぞれの生きる世界は、自身にとっての「当たり前」の集合体から出来上がっています。この世に生まれて以来、自分が親しんできたものの見方、やり方が私たちにとっての「当たり前」をかたちづくっており、これとは違うものに触れると、大抵の場合、違和感や反発、嫌悪感を覚えたり、あるいは無関心という姿勢をとったりします。

それは日常において、私たちが日々、大小無数に体験していることでしょう。公共の場で騒いでいる若者にとって、「仲間と会ったら場所を問わず騒ぐ」が彼らにとっての「当たり前」であり、それを見て苦々しい思いを抱く人にとっては、「公共の場で騒ぐべきではない」がその人にとっての「当たり前」であって、両者が交わる余地は、この場合全く無いに等しい状況です。数十年にわたって村の鎮守の森での祭を続けてきた村落の人々にとって、「鎮守の森を保護すること」は「当たり前」に大きな価値のあることですが、これを共有しない行政の担当者にとっては、地域の再開発計画の邪魔でしかない、「厄介なこと」に過ぎません。「子供を持つのが当たり前」という人生観を持つ人にとって、「子供を持たない人生」を歩んでいる人の価値観は、その実体を知る知らないにかかわらず、根本的に理解しがたく、逆に「子供は、自分の人生を自由に生きるにおいて邪魔な存在」という考えが当たり前の人から見れば、休日毎に子供連れで海や山に行っている人の気がしれない、ということになります。

他人や世間といった、他者との関係において、こうした異なる〈当たり前〉が無数に存在していて、絶えずそれらが衝突し合ったり、相互理解において限界を感じさせたりする、ということは、決して心躍る話ではありませんが、実はそれ以上に、この「自分という個が生きている、自分にとっての〈当たり前〉でできた小さな世界の限界」は、私たち一人一人の人生において深刻な問題になり得ます。それ

は、「自分にとっての〈当たり前〉しか持たないために、それでは対応できないような事態・状況に直面した時、対処できない／のり越えられない」という問題です。この地球上のどこで生活してようと、これまで体験したことのない物事や状況に出遭う、ということはままあります。その時に、「自分にとっての〈当たり前〉の世界」に心身を置いたままдейようとする、容赦なく揺さぶられ、時には文字通り「外に放り出されて」どこへ向かって歩いていけばいいのかさえわからなくなる、ということさえ起き得ます。そして、これは、あくまで私見ですが、昨今の日本社会においては、物質的窮乏の可能性は他国に比べて決して高くない一方、「自分だけの小さい世界」で対処しきれなくなり、精神の支柱を失って彷徨っている「心の難民」状態の人が増え続けているように思うのです。

「人生に深く根ざす学び」は、「個々にとっての〈当たり前〉でできた小さな世界」に、目には見えずとも強い支柱を何本も施すこと、と表現できるかもしれません。

少々突飛かもしれませんが、パソコンの例えでいうなら、個人の生きている精神世界をそれぞれ1台のパソコンだとすると、「自分にとっての〈当たり前〉でできた世界」のみで生きている人は、パソコンにアプリケーション（ソフトウェア）が1種類しかインストールされていない状態、ということになり、このアプリで対処できない事態が生じた際には、そのパソコンは万事休す、お手上げ、ということになり得ます。一方、「人生に深く根ざす学び」を持っている人の場合、そのパソコンには、複数のアプリがインストールされていて、基本のアプリで対処できない事態になった時には、他のアプリで起動や作業を試すことができ、上手く状況を切り抜けることができたりします。しかも、その「切り抜け」は、パソコンの場合のように、単純に「アプリAが使えなかったから、アプリBで立ち上げてみたら、添付ファイルを読むことができた」というデジタルな体験ではなく、「人生に深く根ざす学び」の場合には、実際、もっと深みと人生の滋味を味わわせてくれる体験なのです。

ここで、事例を一つ挙げてみます。十年ほど前に、私が体験したことです。

当時、私は、結婚をして、生まれて初めて実家を出て、兵庫県芦屋市内で夫との暮らしを始めていました。楽しいことも多かったですが、これまで体験したことのない多忙な生活の始まりでもありました。電車を乗り継いで片道1時間半のところにある大阪市の実家では、プロ・ピアニストであり音楽学校校長だった母が、一人で仕事中心の生活をしており、彼女の家事や事務は、結婚後も週3回ほど私が通ったり泊まりこんだりして、こなしていました。私自身、英語の講師として、複数の大学へ掛け持ちで出講もしつつ、当時は研究職として論文も定期的にかけていたので、いつ起きて寝ているのかわからないような状態でした。芦屋と大阪、2軒の住まいの料理・洗濯・掃除・買い物に追われているうちに、精神的余裕がどんどんなくなっていきました。そうすると、文字通り、「目の前のこと」しか見えなくなるのです。大学ではそれなりに古典教養系のテキストを使って授業しているにもかかわらず、時間的・精神的に追いつめられてくると、まさに「心のパソコン」の中で、データ処理が追いつかず、アプリが1個しか立ち上がらなくなる感じになって、教養だ、古典だ、など言っているのか、それよりも今大事なのは、目の前の1パック390円の豚細切れ肉をまとめ買いするかどうか、となってくる。これが毎瞬重なる、心がこわばり、柔軟な発想もできなくなるのが感じられました。「日々の雑事に消耗する」というような意味で、英語の表現に”go through the daily grind”（日常の石臼でひかれる）という

ものがありますが、まさに「日常に心がすりつぶされる」という感覚でした。

そんなある日、晴れた朝に出講先へ急いでいる時に、たまたま赤信号にあたってしまい、横断歩道前で止まらざるを得ませんでした。苛々しながら、ふと周囲に目をやると、桜の木々が満開なのに初めて気づきました。同時に、不意にゆったりとした声と共に、一つの詩が脳内によみがえりました。

時は春 / 日は朝 (あした) / 朝 (あした) は七時 / 片岡に露みちて / 揚雲雀 (あげひばり) なのりいで / 蝸牛 (かたつむり) 枝に這ひ / 神、そらに知ろしめす / すべて世は事も無し

英国の詩人、ロバート・ブラウニングの詩を、日本の文学者、上田 敏が訳したものでした。「春の朝 (あした)」というこの詩を、最初に教えてくださったのは、中学の時の国語の先生でした。「今は難しい言葉だと皆さん思うかもしれないけれど、この詩の良さは、声に出して読んでみてさらにわかるものだと思うの。だから、面倒くさいと思っても、覚えて、暗唱してみましよう」先生はそう仰って、辛抱強く生徒たちに暗唱の指導をして下さったのですが、その時の記憶が、眼前の桜と朝日と共に、やおらよみがえったのでした。

続いて、これに誘われるように、男性の低い声で

The year's at the spring / And day's at the morn; / Morning's at seven; / The hill-side's dew-pearled; / The lark's on the wing; / The snail's on the thorn; / God's in his heaven - / All's right with the world!

が脳内に聞こえました。大学1年生の時に、英文学の基礎を教えて下さった教授の朗読する声でした。「この、最後の All's right with the world というところが有名ですが、そこだけでなく、最終行に至るまでの各行で描かれるイメージの繋がりが大事ですね。これがあって初めて最終行が生きてくる」そして、確認するかのように、All's right with the world、All's right with the world と繰り返されたあの詩が、鮮明に思い出されました。思えば、この教授も「古典の言葉には力があります。今はわからなくても、繰り返し読み、口に出し、覚えていると、いつか何か、得心がいくというのかな、わかる時が来ます」と仰ったのでした。

この間、ほんの一瞬のことだったと思います。しかし、大きな一瞬でした。「目の前のこと」だけにとらわれて、余裕がなくなっていた心に、それこそ春の風と桜の花が吹き込んで、滞った心の空間に新鮮な空気を送り込んでくれたような気がしました。その時、いつの間にか、身体も心も、それまでどうって変わって元気に、活力が湧いてくるのに気づきました。サプリや栄養ドリンクを飲んだわけでもないのに、身体の底から温かく力が感じられたのです。それは本当に不思議な感覚でした。今思えば、これこそ、私にとって「人生に深く根ざす学び」が「発動」した瞬間だったのだと思います。

その後、生活はさらに忙しくなり、やがて脳梗塞と脳出血を繰り返す母の闘病に伴走しながら仕事と家

事をこなす日々が数年間続き、母を見送った後には、家業と実家建物・土地両方をたたむ、という「終わり」の作業と、文化財団を立ち上げる、という「始まり」の仕事の両方が、文字通り怒濤の勢いで一年以上にわたって続きました。けれども、そんな中、「人生に深く根ざす学び」は絶えず私を支え、新たな視点を得るヒントをくれ、元気を与えてくれました。それは今も続いており、これからも続くと思います。

「人生に深く根ざす学び」がなぜ、人に力をくれるのか、ということについて、「自分という個の範囲と限界を超える時空」を自らのうちに持つことができるから、と書きましたが、言い換えれば、それは「自らのうちに、一人の人間の一生を超えるスケールの時空を持つ＝自らのうちに悠久の時を持つ」ということに等しい、ともいえます。これを可能にするのは、「人生に深く根ざす学び」には、洋の東西を問わず、古典が重要な部分を占めるからです。学問でも、文芸でも、芸術でも、数百年、千年の時を経て残ってきたものは、時代や社会の違い、個々の人間の背景を超えて心身に訴えかける力があります。気の遠くなるような長い時間を経てきたがゆえに、その構成システムは複雑精緻を極めていくものが多く、安易に理解し得ない面もありますが、それも楽しみながら親しんでいくうちに、**いつしか、インターネットやSNSの世界では決して手にすることのできない、厚い智恵とゆたかな発想のヒント、その場限りではない励ましを得ることになるでしょう。**かつて、心理学者カール・グスタフ・ユングは「集合的無意識」という言葉で「個人を越えた集団や民族・人類の心に普遍的に存在すると考えられる先天的な元型の作用力動」の存在を指摘しましたが、「人生に深く根ざす学び」は、これとも相通ずるものがあるかもしれません。

「良々塾」では、「実生活に直接影響を及ぼす学び」が盛んな今の社会において、敢えて「人生に深く根ざす学び」に焦点をあててまいります（※それゆえに、「TOEFLやTOEICで高得点をとりたいので、指導してください」というタイプのご希望には添いかねるかと思います。しかしながら、「TOEFLやTOEICがなぜ作られたのか、その背景にはどのような社会的、政治的事情があったのかに興味がある」という方や、「TOEFLに取り組むことで、アメリカ文化や社会について知りたい」という方のご希望には添えると思います）。この塾に参加される皆さまお一人お一人が、より人生と毎日を輝くものにしていかれる時のツール（道具）としての「学び」のメソッド（方法）をお伝えすると同時に、共に「ものを考える」ことによって、普段の生活でのお付き合いとはひと味違った、大人の知的コミュニケーションの手応えを感じていただけたら幸いです。

5月9日、10日に開催する、開塾前の「プレ・オープン 無料セミナー」では、「良々塾」での「学び」の一端を無料で体験していただけます。お一人でも多くの方のご参加をお待ちしております。

一般財団法人カンセイ・ド・アシヤ文化財団 代表理事
良々塾 主宰 山田 良 拝